

エクスプローラープログラム報告書

グローバル地域研究専攻 増木優衣

今回の渡航では、2013 年 7 月 28 日～10 月 6 日までの約 2 か月間インドに滞在し、フィールド選定を兼ねた予備調査を行った。訪れたのは首都デリー、北西部ラージャスターン州、東部オリッサ州、南部タミル・ナードゥ州である。現地では主に社会開発に従事する NGO の活動を観察し、農村部の現地住民にインタビューをする機会を得た。研究テーマは、インド農村部における社会開発と NGO であり、今回の調査では特に不可触民と呼ばれカースト制度の最下層に位置付けられてきた人々や未亡人など、ヒンドゥー教の伝統により差別を受けてきた社会的弱者とされる人々の生活の実態と変化に焦点を当てている。以下に概要を簡潔に述べたい。

最初に訪れたのは、オリッサ州プリーにある、アメリカに本部を置くキリスト教慈善団体“The Assembly of God Church School”が運営しているフリースクールである（写真 1）。ベンガル湾を臨むプリーには漁村が多く、そこに住んでいるのは隣接するアンドラ・プラデーシュ州から移り住んできた人々で、彼らはオリッサ州の公用語であるオリヤー語ではなくアンドラ・プラデーシュ州の公用語であるテルグー語を話す。この学校には漁村の子供たちも多く通っているため、オリヤー語話者とテルグー語話者のための二つの授業が展開されている。この学校教育は中学校までで、高等教育へは金銭的な理由により進学を断念する子供が多いことと、寄付金が足りずに教師を雇う余裕がないことが主な問題点として教師たちによって指摘された。



<写真 1 : “The Assembly of God Church School”の生徒たち>

次に訪れたのは首都デリーに本部を置くスラブ・インターナショナル（Sulabh International、以下スラブ）というNGOである。スラブは政府からの受注で、インド全域の病院や観光地、その他の公共施設に水洗の簡易公衆トイレ（Sulabh Toilet Complexと呼ばれる）を設置し、一回の使用につき2ルピー（約3円）を利用者から徴収することで、トイレのメンテナンス費用を賄っている。このトイレはTwin-pit Toiletと呼ばれ、便器を中心に排泄物をためておく二つの穴を備えており、穴は一つずつ使用し、穴に溜められた排泄物は別の穴を使用している1年～2年の間蓋をして置かれたあと、農業の肥料としても使用される（写真2、3）。インドには伝統的に人間の排泄物を集めて処理する仕事に従事してきた清掃人と呼ばれる人々が存在するが、スラブは水洗トイレを普及させることで彼らを排泄物処理の仕事から解放した。また、スラブはインドの4カ所に清掃人のための職業訓練施設を設置し、そこでは清掃人であった人々が新たな職業に従事し、収入の向上を図っている。



<写真2：Twin-pit Toilet の一種。材料は木材>



<写真 3 : Twin-pit Toilet の一種。材料は土>

そのため、次はスラブの職業訓練施設のうち、ラージャスターン州アルワールとトンクにある施設を訪問した。施設はナイ・ディシャーと言い、ヒンディー語で「新しい道」を意味する。ナイ・ディシャーでは元清掃人の女性たちが空色のサリーを着て、裁縫や刺繍、料理や美容などの作業に従事していた（写真 4、5、6）。そこで作られた商品はナイ・ディシャーや近くのマーケットで販売される。また、元清掃人であった一人の女性のライフストーリーを耳にする機会を得たため、彼女がどのような生活を送ってきたのかについてインタビューをした（写真 7）。



<写真 4：ミシンでカバンを作る女性たち>



<写真 5：手にマンディーと呼ばれるタトゥーのようなものを描く女性>



<写真 6：鮮やかなブルーのサリーを着たナイ・ディシャーの女性たち>



<写真 7：元清掃人の女性へのインタビューの様子>

インド滞在の最後に 3 週間ほど訪れたのは南部のタミル・ナードゥ州で、そこでは主に二つの NGO を訪問した。一つ目は SALT（Stanley Arms of Love Trust）で、農村部における未亡人や低所得の家庭に暮らす女性を対象に、自助グループである SHG（Self Help Group）

を組織したり、SHG でなくても個別に小規模融資を行い、テイラー（縫製）のトレーニングなどを通して収入向上活動を展開したりしている。インドでは伝統的に寡婦の再婚は禁じられており、また寡婦は、ヒンドゥー教徒が額に付けるビンディと呼ばれる飾りも付けることが出来なかったり、夫がいないために一人で遠出することが難しかったりするなど、社会的な問題に直面していると NGO の職員は語った。わたしは寡婦の家を訪れ、実際に直面している彼女にとってのリスクとは何かに関するインタビューを行った（写真 8）。その結果、日常的なリスク（病気や事故など）だけでなく、寡婦ということで周囲の人々との人間関係が変化し、それが彼女にとってネガティブな側面を有していることも垣間見ることが出来た。



<写真 8：寡婦へのインタビュー>

最後に同じくタミル・ナードゥ州にある CIRHEP（Centre for Improved Rural Health and Environmental Protection、シロップと読む）を訪れた。シロップは LIFE という日本の NGO の援助を受け、農村部で環境教育（写真 9）や有機農業、植林の促進および流水域開発事業を行っているが、ここ 2 年間当村はひどい干ばつに悩まされており、雨が降らないことにはなにも始まらないということであった（写真 10）。そのため人々は年間で 100 日間働けるという政府の打ち出した 100 日労働によって日々の収入を得ている（写真 11）。

以上がインド滞在の報告書の概要である。ここで得られた貴重な情報と経験をうまく活用して、今後の調査を有益なものにしてゆきたい。



<写真 9：夕方から夜にかけて行う環境教育の一環>



<写真 10：流水域開発事業地における干ばつの様子。日本の NGO スタッフとシロップによるモニタリングが行われていた>



<写真 11 : 100 日労働に参加する村落の人々>